

星はらはらと

第七回

太田 治子



——二葉亭四迷の明治——

二葉亭四迷は四十五年という短い生涯の中で、何度となく転職を繰り返した。日本で初めての言文一致体の小説『浮雲』を二十四歳の時に発表する一方で、ツルゲーネフ、ゴーゴリなどの作品を次々と翻訳していた。しかし筆一本で生活することは、むづかしかつた。明治二十二年（一八八九）年二十五歳の夏に、東京外国語学校時代の恩師古川常一郎の世話で、内閣官報局雇員となった。月俸三十円、初めての就職である。上司に恵まれ、文章を書く自由も得られる中で、二十九歳の二葉亭は最初の

結婚をした。子供にも恵まれた。順調に昇給をしていたものの、明治三十年、三十三歳の年の暮れには辞職する。そこから、二葉亭の転職癖が始まった。離婚は、その前の年の春先のことだった。再び恩師古川の世話になり、明治三十一年三月の春より陸軍大学校露語学教授嘱託の職が決まった。しかし、一ヶ月と持たなかった。急性膝関節炎にかかった二葉亭は、ここへきて前妻との関係をきっぱりと断つことになる。彼の方は、復縁も考えていたらしい。そのような混乱の中でもこの年の十一月末に

は、海軍編修書記の職がみつかった。父吉数の死は、それから数日後のことである。脚気と慢性胃腸カタルで入院してまもなくあった。かつての自慢の息子の思わぬ彷徨に、吉数は胸を痛めていたことだろう。恐らくそのころのものらしい二葉亭の経歴書の下書が残っている。

「経歴書」

東京市本郷区駒込東片町百廿二番地
東京府士族 長谷川辰之助

文久二年十月八日生

そのように始まっているのだった。二葉亭のいかにも柔らかなたつぷりとした肉筆は、実に読みやすく心地よい。しかし年齢を、二歳半もサバを読んでいた。実際は、元治元（一八六四）年二月三日、もしくは二月二十八日の生まれである。当時はそうやって少し年を上という風習があった。それにしても、どうして文久二（一八六二）年としたのか。どうせサバを読むのなら、文久元年でも、更にその前の年の万延二年でもよかつたのにとと思う。文久二年は、語呂がよい。ただ、それだけのことだったのかもしれない。しかしもしかしたら、二葉亭にとつてその年は、特別な意味のある年だったようにも思われてくるのだった。年譜によると、吉数が尾張藩御鷹場吟味役

の職につき、市ヶ谷の尾張藩上屋敷に定話を命ぜられたのがこの年となる。殿が鷹狩りをする時にいつも傍近くにいってお伴するのは、余程のおめがねに合った果報者といえそうだった。長谷川家にとつて文久二年は、辰之助が生まれた二年後の元治元年と共に、忘れられない年であった。

実はこのころ、夏目漱石の年の離れた姉の佐和が尾張侯の御殿女中を務めていた。二人は、御殿の廊下ですれちがっていたかもしれないのである。当時尾張藩は、めまぐるしく藩主が交替していた。第十四代藩主徳川慶勝（慶喜）は、慶喜を將軍にという一橋派の代表格だった。安政の大獄のころには井伊大老により隠居謹慎を命じられていたものの、安政七（一八六〇）年の桜田門外の変の後には尾張藩の実権は彼が握ることとなった。即ち二葉亭の父長谷川吉数は、第一次長州征伐の総督を務めた徳川慶勝に気に入られたのである。徳川御三家の筆頭でありながら、慶勝は鳥羽伏見の戦いの後には新政府側へと寄り添う姿勢をみせた。支藩の美濃高須藩から尾張藩主に入った彼の弟は、会津藩主松平容保である。心中複雑なものがあって当然だった。藩内の佐幕派が一掃される中で、吉数は日和見主義を貫いた。

おおた・はるこ●神奈川県生まれ。近著に『石の花 林芙美子の真実』『時こそ今は』（ともに筑摩書房）、『明るい方へ 父・太宰治と母・太田静子』『夢さめみれば 日本近代洋画の父・浅井忠』（ともに朝日新聞出版）など。